

多賀城市文化財調査報告書 第16集

# 年 報 2

昭和 62 年 度

昭和 63 年 3 月

多賀城市埋蔵文化財調査センター

## 序

市制施行15周年記念事業として昭和62年4月に開館した多賀城市文化センターは、多賀城政府をモチーフとし、随所に「史跡のまち多賀城」のイメージを近代建築に取り入れた特色のある文化施設となっています。市民会館、中央公民館、埋蔵文化財調査センターの三つの施設が複合する当センターが、今後それぞれの特徴を生かし市民の芸術文化活動の拠点として、また交流の場として広く活用されることを願ってやみません。

埋蔵文化財調査センターは、奈良・平安時代に東北地方の政治・文化の中心地として栄えたという誇りうる歴史をもつ本市において、地域の伝統文化を保護・育成し、併せて貴重な文化財を後世に引き継ぐために設立された機関です。主な事業としては、遺跡の発掘調査、考古・民俗などの歴史資料の収集・保存、文化財愛護精神の普及・啓発活動などがあげられます。このほか、郷土の歴史をより身近に感じていただくため、昭和62年7月に展示室を開設して資料の展示・公開を行っています。

本報告書は、当センターが昭和62年度に行った発掘及び試掘調査のうち、一般開発関係の新田遺跡、八幡沖遺跡、山王遺跡、高原遺跡、高橋浜居場地区の5箇所の成果を概略的にまとめたものです。中でも昨年に引き続き実施した新田遺跡第6次調査においては、大溝をめぐらした大規模な館跡が発見され、この地区に中世の武士の館が近接して多数宮まれていた様子が次第に判明してきました。

今年度は、当センターが開設して1年目にあたり、体制面の見直しから新規事業の着手まですべて試行錯誤の連続でした。こうして所期の目的をまぎりなりにも達成できたのも、ひとえに関係各位の暖かい御支援と御指導の賜と厚く感謝いたしております。今後とも事業内容の一層の充実に努めていく所存でありますので、皆様の変わらぬ御指導と御協力をよろしくお願い申し上げます。

昭和63年3月

多賀城市埋蔵文化財調査センター

所長名取恒郎

## 例　　言

1. 本書は、昭和62年度に実施した一般開発関係に関する新田遺跡、八幡沖遺跡、山王遺跡、高原遺跡、高橋浜居場地区の調査成果を概略的にまとめたものである。
2. 本書の執筆・編集は、各調査の担当職員が分担して行った。
3. 本書中の土層の色調については、「新版標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄：1976)を使用した。
4. 調査、整理に関する諸記録及び出土遺物は、多賀城市埋蔵文化財調査センターが一括保存している。

## 調　　査　　体　　制

調査体制は次のとおりである。

○多賀城市教育委員会　社会教育課文化財保護係

(宮城県多賀城市中央2丁目27番1号)

社会教育課長	名取恒郎
文化財保護係長	高倉敏明
技　　師	滝口　卓
主　　事	柏原靖史

○多賀城市埋蔵文化財調査センター

(宮城県多賀城市中央2丁目27番1号)

所　　長	名取恒郎（兼務）
主　　査	高倉敏明（＊）
技　　師	石川俊英
＊	千葉孝弥
＊	石本　敬
＊	相沢清利
嘱　　託	鈴木久夫
＊	滝川らかこ

# 本文目次

序 文

例 言

調査体制

調査要項

I.	新田遺跡（第6次調査）	2				
1.	調査要項	2. 遺跡の立地	3. 調査経過	4. 調査成果	5. まとめ	
II.	八幡沖遺跡	9				
1.	調査要項	2. 遺跡の立地	3. 調査経過	4. 調査成果	5. まとめ	
III.	高橋浜居場地区	12				
1.	調査要項	2. 遺跡の立地	3. 調査経過	4. 調査成果	5. まとめ	
IV.	山王遺跡	16				
1.	調査要項	2. 遺跡の立地	3. 調査経過	4. 調査成果	5. まとめ	
V.	高原遺跡	23				
1.	調査要項	2. 遺跡の立地	3. 調査経過	4. 調査成果	5. まとめ	

## 挿 図

図 1	多賀城市内遺跡分布図	1	第2図	調査区トレント配置図	13
新田遺跡（第6次調査）			第3図	第4・5・8トレント実測図	15
第1図	調査区位置図	2	山王遺跡		
第2図	II区造構配置図	4	第1図	調査区位置図	16
第3図	K-35土塙出土遺物	5	第2図	トレント配置図	17
第4図	第Ⅲ層川土遺物	5	第3図	第1・2トレント実測図	18
第5図	K-58土塙出土遺物	6	第4図	第3～6トレント実測図	19
第6図	Ⅲ区造構配置図	6	第5図	SE01セクション図	20
第7図	IV区造構配置図	7	第6図	造構内出土遺物1	20
八幡沖遺跡			第7図	造構内出土遺物2	21
第1図	調査区位置図	9	第8図	堆積土出土遺物	22
第2図	調査区平面図・セクション図	10	高原遺跡		
第3図	出土遺物	11	第1図	調査区トレント配置図	23
高橋浜居場地区			第2図	第2トレント北壁セクション図	24
第1図	調査区位置図	12			

# 調査要項

1. 昭和62年度に実施した発掘調査の概略は次のとおりである。

国庫補助事業関係（多賀城市文化財調査報告書第15集 昭和62年度発掘調査報告書に掲載）

遺跡名	所在地	時代	種類	調査期間	担当職員	備考
柏木遺跡	多賀城市大代5丁目1-1他	旧石器・縄文・奈良	包含地 製鉄遺跡	昭和62年8月17日～ 昭和63年3月3日	石川、相沢	
新田遺跡(西地区)	・ 新田字西3番1、39-2	古墳・奈良～中世	古墳	昭和62年11月12日～19日	石本	試掘
新田遺跡(後地区)	・ 新田字後11-1他	・	古墳	昭和63年1月25日～2月2日	千葉	・
山王遺跡	・ 山王字山王二区179他	古墳・奈良～近世	古墳	昭和62年12月7日～15日	石本	・

一般開発関係（本書に掲載）

遺跡名	所在地	時代	種類	調査期間	担当職員	備考
新田遺跡(第6次調査)	多賀城市山王字北舟福寺1-1他	古墳・奈良～中世	古墳	昭和62年4月24日～7月1日 7月23日～12月25日	千葉、石本	
八幡沖遺跡	・ 宮内1丁目151-1、151-6	奈良・平安	散在地	昭和62年10月15日～23日	瀬口	試掘
山王遺跡	・ 南宮字八幡	古墳・奈良～近世	古墳	昭和62年11月30日～12月5日 12月17日～23日	石本	
高原遺跡	・ 浮島字高原120、121-1	奈良・平安	散在地	昭和63年3月3・4日	・	試掘
高橋浜居場地区	・ 高橋字浜居場36-1他			昭和62年11月4日～10日	・	・

## 2. 調査協力者

宮城県多賀城跡調査研究所、多賀城市下水道課、福仙興業株式会社、株式会社橋本店  
学校法人仙台育英学園、株式会社大林組、浦山重幸、伊藤 博

## 3. 調査参加者

赤間かつ子、阿部敏子、阿部トシ子、阿部けい子、阿部美智子、阿部美津子、阿部米子  
井川温子、遠藤一代、大山貞子、小野玉乃、加藤文一、菊池 豊、黒崎庸治、熊谷好子  
熊谷あつ子、熊谷きみ江、後藤はつみ、後藤恵子、桜井栄子、佐々木四郎、佐藤たま子  
佐藤一子、佐藤節子、下道博信、鈴木 効、菅原絹代、高野敏子、千葉享一、角田静子  
本田ノブ子、渡辺國恵、渡辺ゆき子

## 4. 遺物整理

佐藤悦子、柏倉霧代、須藤美智子、熊谷純子、黒田啓子

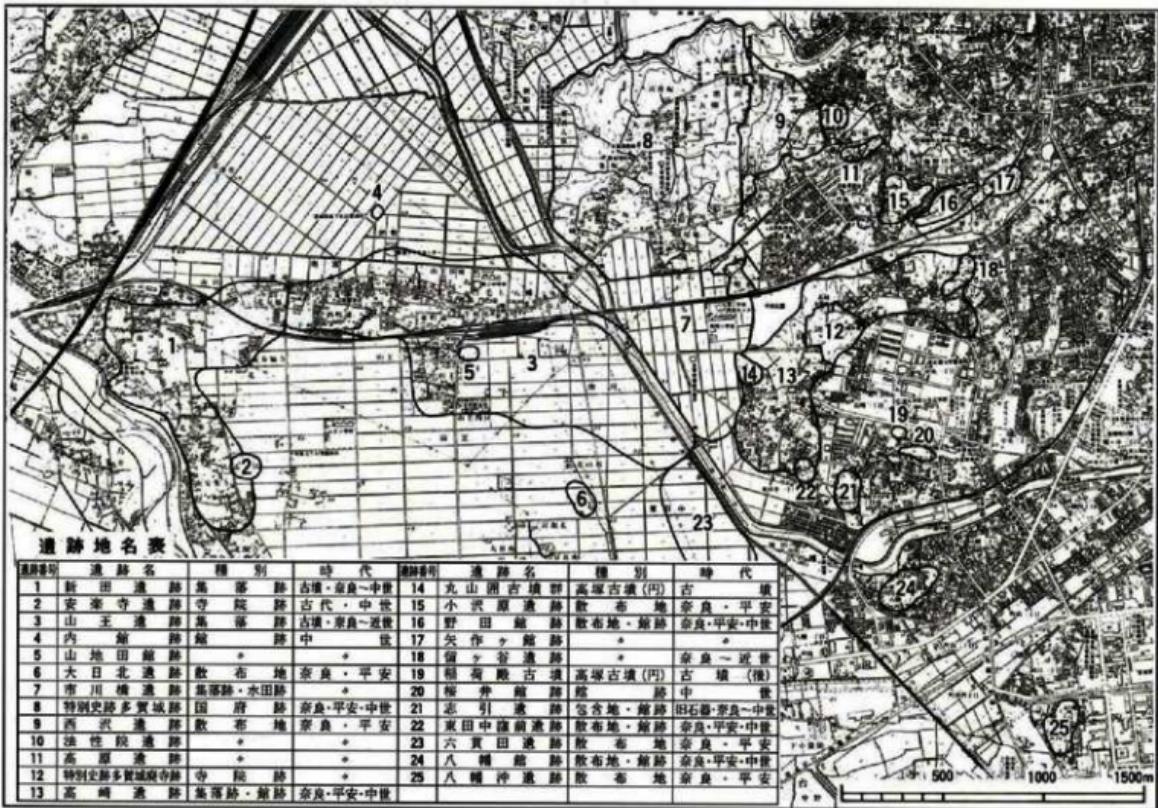


図1 多賀城市内遺跡分布図

# I 新田遺跡(第6次調査)

## 1. 調査要項

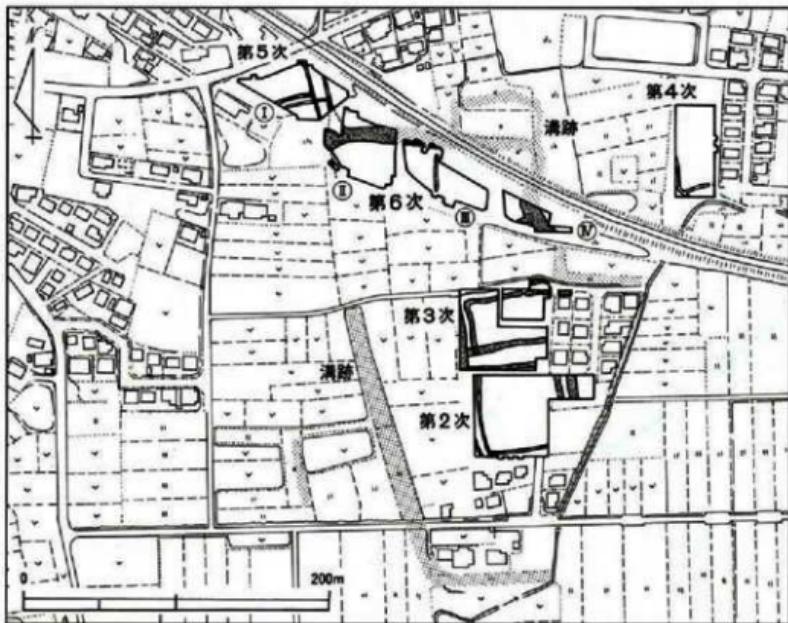
- 所在地：多賀城市山王字北寿福寺1-1他11筆
- 調査期間：昭和62年4月24日～7月1日、7月23日～12月26日
- 調査面積：3,090m<sup>2</sup>（対象面積9,617m<sup>2</sup>の内、1,539m<sup>2</sup>は昨年度調査完了）

## 2. 遺跡の立地

新田遺跡は、多賀城市的西端部に位置する遺跡である。西侧を流れる七北田川によって形成された自然堤防上に立地しており、古墳時代から中世にかけての集落跡として知られている。本遺跡の東側に接する山王遺跡や、七北田川の対岸に所在する鴻ノ巣遺跡（仙台市）は、本遺跡とはほぼ同時代の集落跡である。

## 3. 調査経過

昭和61年9月に開発申請のあった多賀城市山王字北寿福寺1-1他11筆については、昭和61・62年度の2ヶ年にわたって調査を実施することになっており、本年度はその2年目にあたる。調査は、西侧から順次東側へと進めており、昨年度はⅠ区とⅡ区（一部）について調査を実施



第1図 調査区位置図

した。今年度は、一部重複するがⅡ区全体とⅢ・Ⅳ区について調査を実施した。なお、発掘基準線は国家座標の方位をとっている。

#### 4. 調査成果

今回の調査では、古墳時代から中世に及ぶ多くの遺構や遺物を発見した。特に、中世の遺構・遺物については昨年度にも増して豊富な資料が得られている。それらについては、現在整理検討中であるため、ここでは全体の概要と主な遺構の説明にとどめたい。

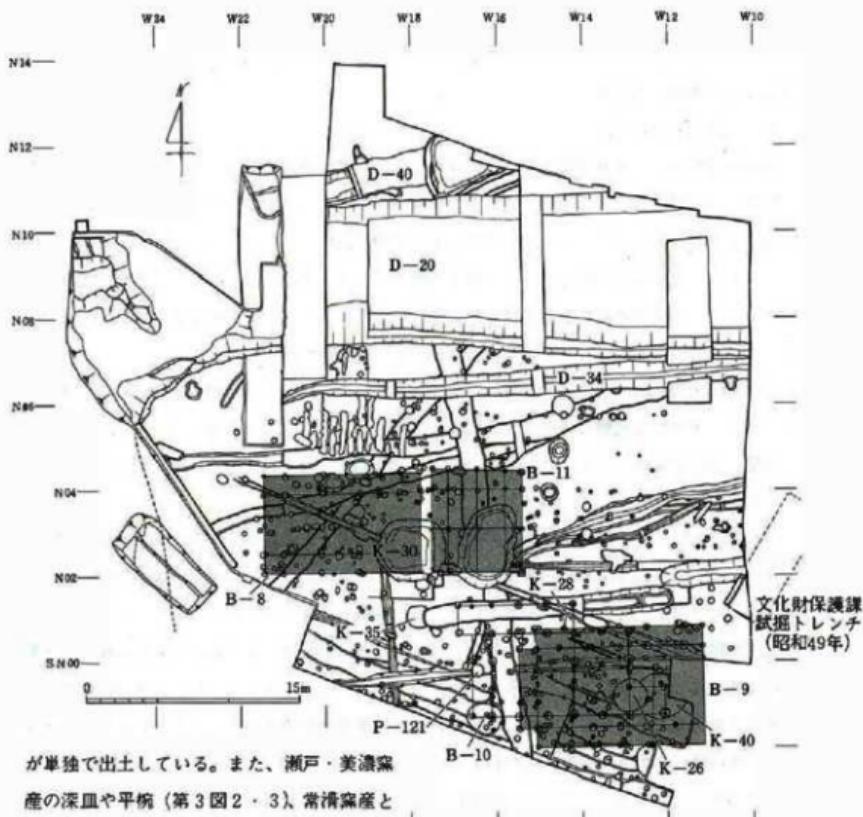
はじめに、調査区内の層序について簡単に触れておく。表土を取り除くと、中世の遺物や炭化物を含む黒褐色砂質土が堆積しており（第Ⅳ層）、その下は遺物を含まない砂層（第Ⅲ層）となっている。この二つの層の上面は、いずれも遺構確認面となっている。なお、第Ⅲ層とした黒褐色砂質土については、寿福寺地区内の隣接する第2～5次調査区においても確認されており、全体的な遺構の変遷等を把握するうえで整層になるものと考えている。

〔Ⅱ区〕中世の遺構としては、北半部で東西に走る溝跡、南半部で掘立柱建物跡・土塁・溝跡などを発見した。

D-20溝跡は、昨年度の調査で一部検出していたもので、本地区において南北両壁を捉えることができた。方向は東西発掘基準線とほぼ一致し、Ⅱ区の北部をかすめて東へとのびている。埋土中より「大日如来」と墨書きされた塔婆（図版7-4）などが出土している。

掘立柱建物跡は南半部で5棟確認している。しかし、建物跡として組み合わない柱穴も多数存在することから、実際はもっと多くの建物が存在したと考えられる。B-8建物跡は昨年度の調査で発見したものである。K-30土塁によって東棟が破壊されているが、東西5間・南北4間の東西棟で、南北二面廻付建物跡と考えられる。柱穴の多くに抜き取り穴が確認されており、その埋土中よりカワラケなどが出土している。B-17建物跡は、B-8建物跡の東側に近接して検出したものである。東西4間・南北3間で正方形に近い平面形を呈している。この2棟の建物跡は第Ⅳ層上面で検出したものであるが、これらの南側に位置するB-9・10建物跡は第Ⅲ層上面で検出した建物跡である。B-9・10建物跡は、重複しているが柱穴に切り合いがないため新旧関係は不明である。しかし、軸線が発掘基準線と一致すること、方形の柱痕跡が認められること、建物内部に間仕切りがあるなどの共通点を指摘できる。

土塁は、概ね円形或は梢円形の平面形を呈するものである。K-27・30土塁のように大規模なものや、K-26・28・35土塁のように径2.4～1.6mを計るものなどが見られる。前者については明らかでないが、後者については素掘りの井戸跡と考えている。K-28土塁からは、杓子・物忌札・舟形などの木製品が出土している（図版3、図版7-5・6）。舟形の轆には、舵の一部も残存している。K-35土塁は、埋土の土層觀察より人為的に埋められたと考えられる。底面には凝灰岩製の方形の鉢が割れた状態で集まっており、その少し上から人間の頭蓋骨のみ



が単独で出土している。また、瀬戸・美濃窯

産の深皿や平椀（第3図2・3）、常滑窯と

推定される無釉陶器の壺（第3図1）なども

出土している。第3図4の尊式花瓶は、本土

埴とピット121より出土した破片が接合したものである。外面全体に鉄釉を施したもので、瀬戸

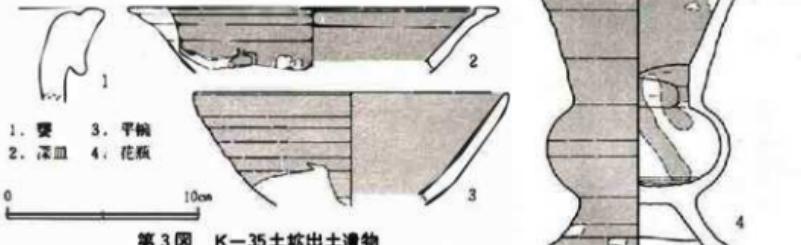
・美濃窯の製品である。

なお、南半部の第III層からは多くの遺物が出土している。それらの中には、灰釉を施した瀬戸窯産の深皿（第4図2～4）や、焼し焼きした火鉢（第4図1）のように日常雑器類と見られるものも多いが、白磁梅瓶や、魚文を浮き出した白磁小型壺などの舶載磁器も少なくない。後者については、多数の細片となって出土していることを指摘しておきたい。

古代の遺構は、中世の遺構によって破壊を受けているため、遺存状況が不良なものが多く、数も少ない。しかし、遺構の分布はほぼ調査区全体に及んでいる。遺構は、土塙と溝跡を発見している。K-40土塙は、調査区南東隅で発見したもので、平面形は円形を呈している。中位

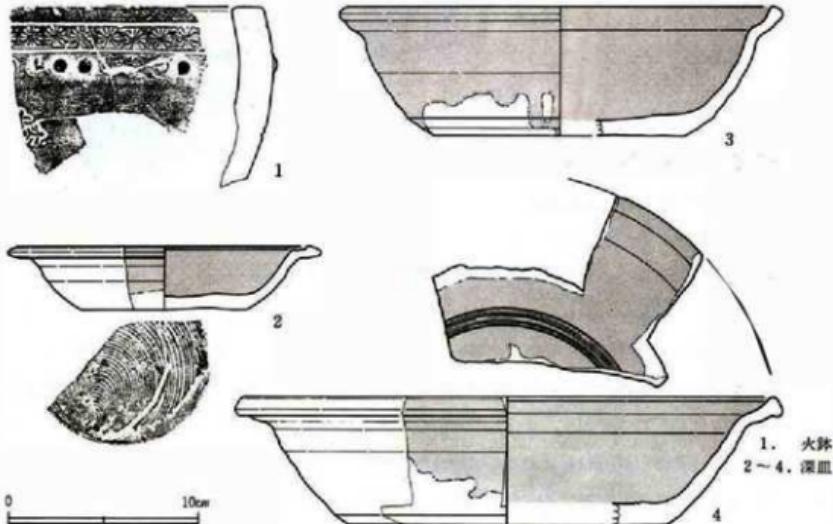
第2図 III区遺構配置図

より底面にかけて、しがらみで四方の壁を保護している。D-40溝跡は、調査区北部で発見した東西溝である。埋土最上部のくぼみに灰白色火山灰が堆積している（註1）。

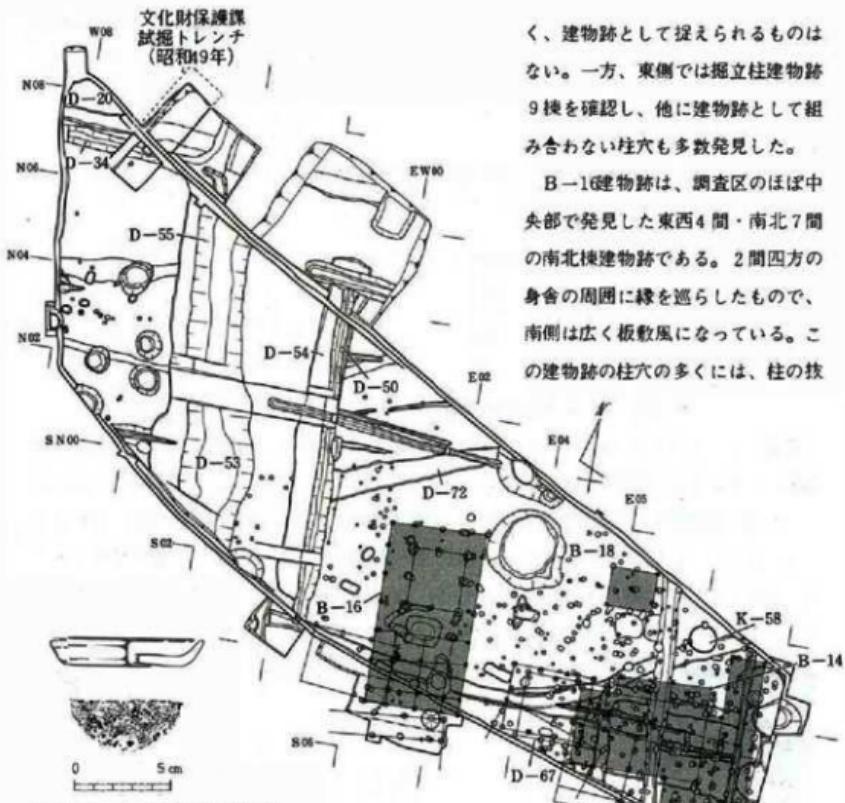


第3図 K-35土塗出土遺物

〔Ⅲ区〕はじめに中世の遺構についてみると、調査区北西部では、Ⅱ区からのびてきたD-20溝跡と、その南側に隣接してD-34溝跡を検出した。また、これらの溝跡の東側では、D-50・54・53・55溝跡などの南北溝を発見した。両者の関係を見ると、D-50・54溝跡は接するごとなく途切れているのに対し、D-55溝跡は、D-34溝跡と接続してD-20溝跡を分断している。Ⅲ区における遺構の分布を見ると、D-50・54溝跡を境にして、その東西で大きく様相が異なっている。これらの溝跡の西側には円形の土塗が6基集中してはいるものの、柱穴は少な



第4図 第Ⅲ層出土遺物



第5図 K-58土塚出土遺物

き取りや切り取りの穴を確認することができた。それらの埋土には、焼土や炭化物が多く含まれ、遺物

も火を受けているものが多いことから、本建物跡は火災によって焼失したものと推定される。この建物跡の主軸方向は、発掘基準線と一致しているが、同様の主軸方向を持つ建物としては、小規模なB-18建物跡や、複雑な間取りのB-14建物跡などがある。これらは3棟とも第Ⅳ層上面で検出したものであり、共存した可能性が大きいと考えられる。

土塚は、平面形が円形を呈するものは大部分素掘りの井戸跡と考えられるものである。Ⅲ区においては、東西両端部に集中して検出された。東半部の第Ⅳ層上で検出したK-58土塚は、埋土中に炭化物や灰が厚く堆積しているものである。土層の断面観察や遺物の出土状況から、

く、建物跡として捉えられるものはない。一方、東側では掘立柱建物跡9棟を確認し、他に建物跡として組み合わない柱穴も多数発見した。

B-16建物跡は、調査区のほぼ中央部で発見した東西4間・南北7間の南北棟建物跡である。2間四方の身舎の周囲に縁を巡らしたもので、南側は広く板敷風になっている。この建物跡の柱穴の多くには、柱の抜

第6図 Ⅲ区遺構配置図



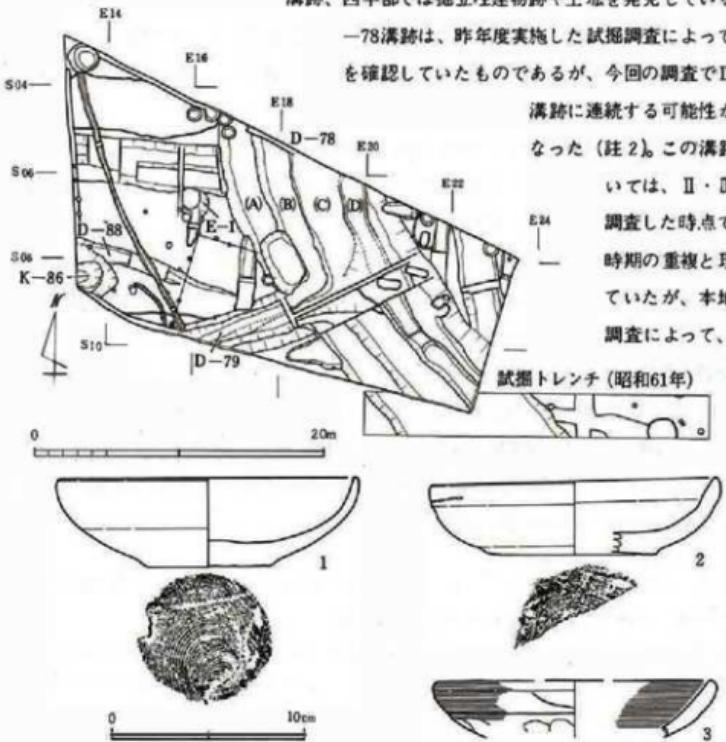
人為的に短期間で埋められたと推定される。本土塙の底面から出土した茶臼の上臼部分（図版7-2）は、B-16建物跡の柱切り取り穴より出土したものと接合した。これらのことから、本土塙もB-16建物跡と一緒に存在した遺構の可能性が大きいと考えられる。本土塙からは他にも多くの遺物が出土している。常滑窯や地元の窯の製品と推定される無釉陶器の大甕、瀬戸・美濃窯産の瓶子・深皿・鉢皿、カワラケ（第5図）、中国製品としては、白磁や褐釉陶器の四耳壺、また炭化米のブロックなどと豊富である。なお、図版7-2の茶臼の下臼と見られるものがD-53溝跡より出土している（図版7-3）。

古代の遺構としては溝跡がある。D-67溝跡は、断面形が逆台形を呈し、東西発掘基準線と方向を同じくする溝跡である。埋土には灰白色火山灰の小粒をわずかに含んでいる。底面より鉄が1点出土している。D-72溝跡は、調査区のほぼ中央部で発見した古墳時代の溝跡である。

〔IV区〕中世の遺構としては、中央部から東半部にかけて溝跡、西半部では掘立柱建物跡や土塙を発見している。D

-78溝跡は、昨年度実施した試掘調査によって存在を確認していたものであるが、今回の調査でD-20

溝跡に連続する可能性が高くなつた（註2）。この溝跡については、II・III区を調査した時点では2時期の重複と理解していたが、本地区的調査によって、4時



第7図 IV区遺構配置図・K-86土塙出土遺物

期以上の重複があることを確認した。遺物は、陶磁器をはじめ巻や小刀などが出土している。また、D-78溝跡の西壁には、東西に走るD-79溝跡が接続している。この溝跡にも3時期の重複が認められた。K-86土塙は、調査区西端の第IV層上で検出した土塙である。調査区の制約から西半部は調査できなかった。カワラケが5個体分出土しており、ロクロ調整のもの（第7図1・2）とてづくねのもの（第7図3）が見られる。D-88溝跡は、K-86土塙の北部に接続する溝跡である。遺存状況は悪い。白磁の皿と四耳壺が出土している。

古代の遺構としては、Ⅲ区よりのびてきたD-67溝跡や、E-1井戸跡などを発見している。

## 5. まとめ

中世の遺構としては、掘立柱建物跡・井戸跡・土塙・溝跡があり、古代の遺構としては、井戸跡や溝跡などを発見している。以下、中世のものを中心に若干のまとめを行なう。

1. Ⅱ～Ⅳ区で発見した建物跡や井戸跡などは、Ⅰ区と同様館跡の一部と考えられる。D-20・78溝跡は、その北辺と東辺にあたるものと推定している。
2. 建物跡や井戸跡の分布を見ると、Ⅱ区南東隅からⅢ区西端にかけての地区と、Ⅲ区東半部に集中している。D-50・54溝跡などの南北溝は、この両ブロックを区画する溝と見ることが可能である。
3. 今回発見した館跡は、Ⅰ区の館跡と比較した場合、規模の点で大きく上回っている。建物跡についてみても、扉の付くものや間仕切りのあるものなど規模の大きいものが存在する。出土遺物についても同様で、質量とも圧倒的に優っている。
4. 第IV層上面で検出した遺構の中には、埋土中に焼土や炭化物を多量に含むものがある。このような埋土の特徴を持つ遺構は、同時期に存在した遺構として把えられる可能性が大きく、今後、隣接地域の調査を行なう際にも注意して行きたい。
5. 遺構の年代については、12世紀から16世紀に及ぶものと考えられる。少ない例であるが、K-86土塙やD-88溝跡の出土遺物は、12世紀末まで遡り得る内容を持っている。
6. 古代の遺構の分布は、調査区のほぼ全域にわたっているが、遺構間のまとまりはあまり見られない。しかし、D-40溝跡は、昨年度調査を行なったⅠ区のD-18・24溝跡と主軸方向や灰白色火山灰との層位関係に共通性が窺える。

註1 この灰白色火山灰の年代については、10世紀前半頃と考えられている。白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」宮城県多賀城跡調査研究所「研究紀要Ⅵ」1980

註2 多賀城跡所蔵西堀が保管している明治19年の地籍図（宮城郡山王村字北寿福寺・南寿福寺）を見ると、東西に走るD-20溝跡と南北に走るD-79溝跡は、JR東北本線の北側ではば直角に接続している様子がわかる。また、D-20溝跡は、Ⅱ区西端部で南側に折れ曲がっているが、その延長線上の畠地の中には、細長い水田となって、溝跡が埋没している状況を窺うことができる（第1図）。

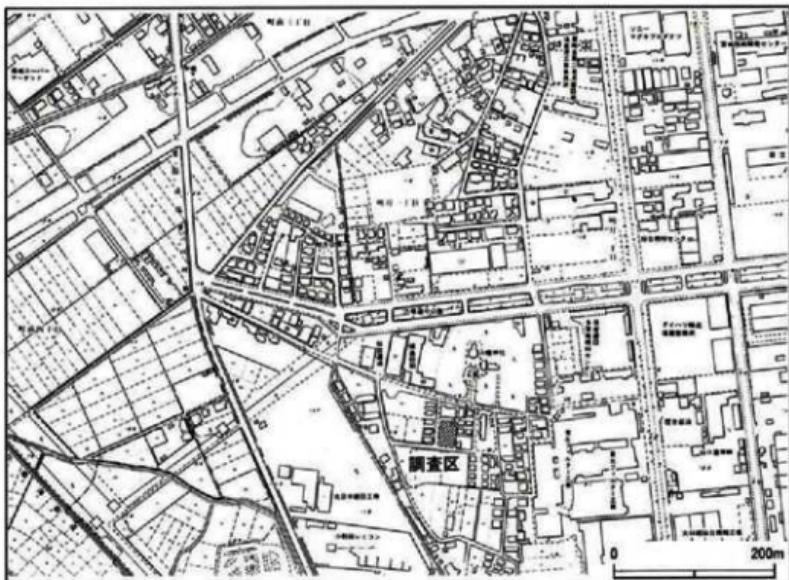
## II 八幡沖遺跡

### 1. 調査要項

○所在 地：多賀城市宮内一丁目151-1、151-6

○調査期間：昭和62年10月15日～23日

○調査面積：90m<sup>2</sup>（対象面積1,200m<sup>2</sup>）



第1図 調査区位置図

### 2. 遺跡の立地

八幡沖遺跡は、多賀城市宮内一丁目地内に所在し、仙台湾によって形成された標高約2mの自然の浜堤上に立地している。本遺跡は、古くから奈良・平安時代の土師器、須恵器の散布地として知られているが、これまでに発掘調査は実施されておらず、遺跡の性格や範囲については不明である。

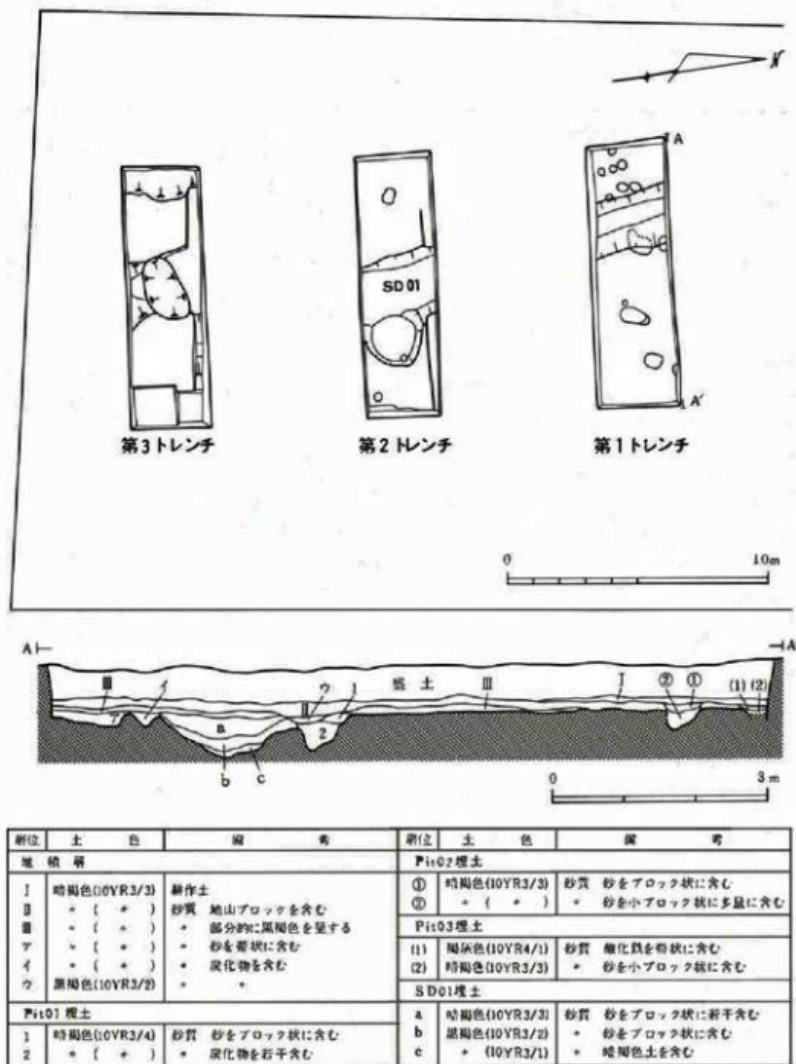
本調査区は、古くから地元の信仰を集めている八幡神社の南側に隣接し、現状は宅地である。

### 3. 調査経過

本調査は、昭和62年4月に株式会社山口重車輶の破産管財人より当該土地売買の意向があり、その対外交渉の前に遺構の有無を明らかにしておきたいとの依頼を受けて、試掘調査を実施し

たものである。

調査は、当該地に  $3 \times 10\text{m}$  のトレンチを東西方向に 3 本設定して行った。トレンチは北側から順に第 1 ~ 3 の番号をつけた。



第2図 調査区平面図・セクション図

#### 4. 調査成果

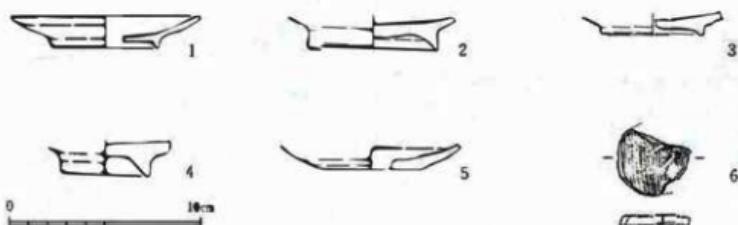
調査区内の基本層位は、第Ⅰ層～第Ⅲ層まで暗褐色砂質シルトであり、その下層が明黄褐色砂質シルトの地山である。第Ⅰ層～第Ⅲ層まで擾乱を受けている。

発見遺構は、溝跡1本とピット数個だけである。

SD 01溝跡は、各トレーニチの地山上で検出した南北方向に延びる溝跡である。幅は第3トレーニチで約2.0mで、深さは約55cmを計る。埋土は、上層に炭化物を斑状に含む黒褐色砂質シルトからなり、出土遺物は、赤焼き土器の小破片が少量出土している。

#### 5. まとめ

今回の調査で検出されたSD 01溝跡は、出土した遺物が小破片で、出土量も少なく流れ込みによるものと思われる。掘り込み面が削平、擾乱を受けていることから年代等については不明である。また、調査区内には生活の痕跡が認められず、当該地区には遺構が存在しないと判断される。



「T」はトレーニチの略 単位: cm ( )は推定値

No	出土場所	性 質	形 状	外 面 調 整	内 面 調 整	口 径	底 径	高 度	備 考
1	SD 01	赤焼き土器	高台窓	ロクロナデ	ロクロナデ	(9.8)	(5.6)	1.7	
2	*	*	—	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り	*		(6.8)		
3	*	*	—	ロクロナデ	*		(5.4)		
4	3T L1	*	—	*	*		4.7		
5	2T L2	*	杯	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り	*		(5.6)		
6	2T L1	円盤状製品	—	—	—	—	—	—	土縛器を転用

第3図 出 土 遺 物

### III 高橋浜居場地区

#### 1. 調査要項

○所在地：多賀城市高橋字浜居場 36-1他

○調査期間：昭和62年11月4日～10日

○調査面積：300m<sup>2</sup>（対象面積18,000m<sup>2</sup>）



第1図 調査区位置図

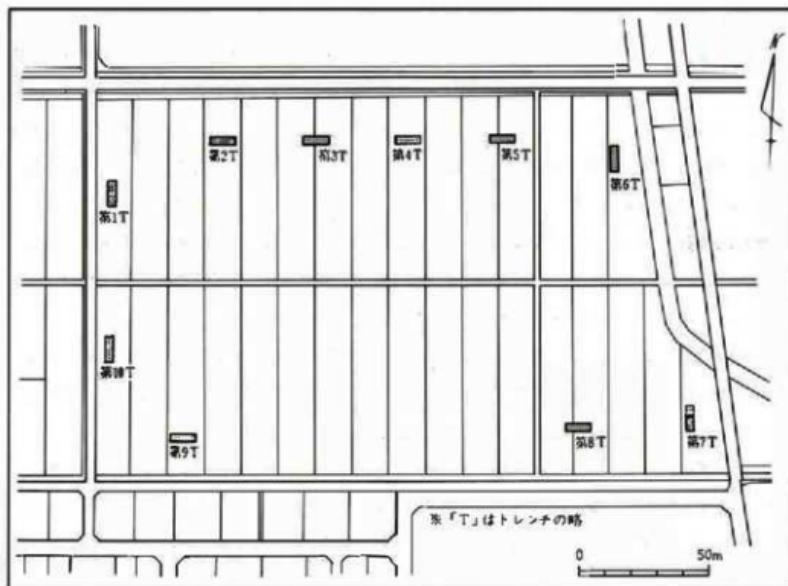
#### 2. 遺跡の立地

本調査区は、現在多賀市の西端を流れる七北田川と、ほぼ中央を流れる砂押川によって形成された冲積地上に立地する。この地域は、広義の仙台平野の最北端に位置し、堆積土はスクリューモトと呼ばれる有機質粘土・シルトと砂層との互層からなっている。調査区はJR仙石線中野米駅の北側約500mに位置し、現況は標高約3.0mの水田である。

#### 3. 調査経過

本調査については、昭和62年8月に学校法人仙台育英学園よりグランド用地として開発する計画が提示されたため、本件申請について協議を行った。当該地は、埋蔵文化財保護地としては登録されていない。しかし、北側一帯には特別史跡多賀城跡を取り巻くように大規模な集落跡が数多く所在しているため、当地域内の遺跡の存在を確認する目的で試掘調査を実施するに至ったものである。

調査は、当該地全域をほぼ囲むように3×10mのトレンチを10本設定して行った。そして、



第2図 調査区トレンチ配置図

北西側から順に時計まわりの方向で第1～10トレンチとした。

#### 4. 調査成果

本調査区の基本層位は、第Ⅰ層暗灰黄色粘土質シルト(耕作土)、第Ⅱ層黄灰色粘土質シルト、第Ⅲ層黒褐色粘土質シルト、第Ⅳ層暗灰黄色粘土質シルトである。なお、第Ⅳ層中には10世紀前半に降下したとされている灰白色火山灰が含まれている。各層位は、調査区北西部に位置する第2～6トレンチにおいて明瞭に観察できるが、南東部に位置する第7・8トレンチでは、第Ⅰ層の下が直接地山であるに由い黄色砂質シルトになっている。地表面から地山面までの深さは、前者が30～40cm、後者が15～20cmを計る。また、南西部に位置する第1・9・10トレンチでは第Ⅱ・Ⅲ層が確認できず、かわって黄灰色砂質シルト層と黒褐色を呈するスクモ層が50～60cmの厚さで互層となっている。そして、この下に灰白色火山灰を多量に含む第Ⅳ層が約10cmの厚さで堆積している。地表面から地山面までの深さは80～90cmを計る。

遺構は、調査区東半部で溝跡5条を検出した。

**SD01溝跡** 第4トレンチ第Ⅱ層上面で検出した南北方向に延びる溝跡である。上幅約1.6m、下幅約1.0m、深さ約0.65mを計る。底面はほぼ平坦で、壁は丸味をもつてゆるやかに立ち上がる。埋土は2層に分けられるが、土質、色調とも両者の間に大きな違いはみられない。

遺物は出土していない。

SD02溝跡 第4トレンチ第II層下面で検出した南北方向に延びる溝跡である。SD01溝跡と重複しており、東壁の上部がこれによって切られている。下幅約60cm、深さ約70cmを計る。底面はやや平坦で、壁は丸味をもってゆるやかに立ち上がる。埋土は2層に大別でき、上層が褐色～黒褐色のスクモ層、下層はにぶい黄色粘土質シルトである。下層上部には約5cmの厚さで灰白色火山灰が堆積している。遺物は出土していない。

SD03溝跡 第5トレンチ第III層下面の地山上で検出した南北方向に斜行する溝跡である。上幅1.1～1.5m、下幅0.4～0.7mを計る。深さは約15cmと非常に浅く、幅や底面の形態も一様ではない。埋土は、灰白色火山灰を斑状に含む黄灰色粘土質シルトからなる。

SD04溝跡 第8トレンチ第II層下面の地山上で検出した東西方向に斜行する溝跡である。上幅約90cm、下幅15～25cm、深さ約30cmを計る。底面は丸味をもち、壁もゆるやかに立ち上がる。埋土は、灰白色火山灰を斑状に含む暗灰黄色粘土質シルトからなる。

SD05溝跡 第8トレンチ第I層下面の地山上で検出した溝跡である。大部分が遺構外にかかるため全容は不明である。壁は東壁でみると、底面からほぼ直角に立ち上がり中頃で段をもつ。埋土は、第I層に類似した黄灰色粘土質シルトを基本としている。遺物は、近代以降のものと思われる陶器が出土している。

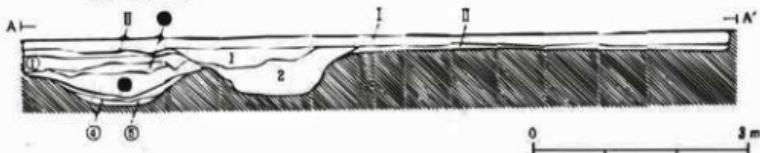
出土遺物についてみると、遺構に伴なうものはSD05溝出土の陶器のみである。堆積土出土のものは第IV層中から土師器の破片がわずかに出土している。年代等の詳細については不明である。

## 5. まとめ

本調査で検出された5条の溝跡のうち、SD01・05溝跡は掘り込み面や埋土の状況、出土遺物から近代以降のものと考えられる。他の3条の溝跡については、出土遺物が少ないため時期を限定することはできないが、埋土中に灰白色火山灰を含む点で共通しており、大きく平安時代に属するものと考えることができる。これらは非常に浅いものや、方向や幅、底面の形態が一律でなかったり、埋土に厚くスクモが堆積するなどの点がみられ、いずれも人為的な施設とは考えにくく、むしろ小河川跡などの自然の作用によるものである可能性が強い。また、調査区南西部においては灰白色火山灰層の上にスクモ層と砂層の厚い堆積がみられ、平安時代以降も河川などによる土砂の堆積が著しかったと考えられる。さらに調査区周辺には、袋、川前、沼田、小深、浜居場、奈賀渕、古川などの小字名がみられ、近世初めごろまでは七北田川がこの地を東流し、現在の七ヶ浜町の漆浜に流れこんでいたといわれている。これらのことから、この付近一帯は旧七北田川の氾濫原として、かなり広範囲に長期間低湿地が広がっていたものと考えができる。

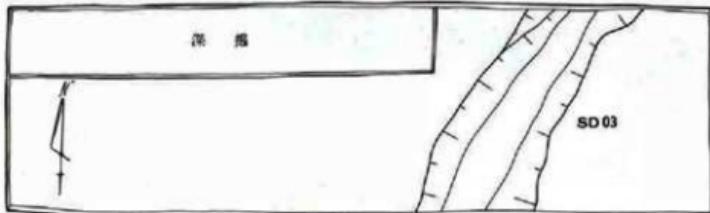


第4トレンチ

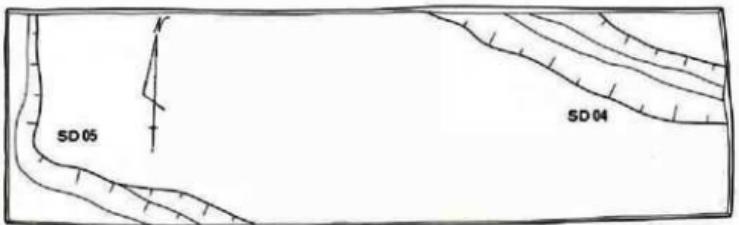


第4トレンチ土層観察表

層號	土色	備考	層號	土色	備考
基本帶質					
I	暗灰黃色 (2.5Y 4/2)	耕作土	①	褐灰色 (10YR 5/1)	SD02底土
II	黃灰色 (2.5Y 4/1)	粘土質	②	褐色 (10YR 4/4)	*
SD01底土					
1	暗灰黃色 (2.5Y 5/2)	粘土質	③	黑褐色 (10YR 3/2)	* ややスクモ状
2	黃灰色 (2.5Y 5/1)	*	④	にぶい黃色 (2.5Y 6/3)	* スクモ層
			⑤	～ (2.5Y 6/4)	* 淡白色火山灰を層状に含む



第5トレンチ



第8トレンチ

第3図 第4・5・8トレンチ実測図

# IV 山王遺跡

## 1. 調査要項

○所在地：多賀城市南宮字八幡

○調査期間：昭和62年11月30日～12月5日、12月17日～23日

○調査面積：約70m<sup>2</sup>（対象面積 250m<sup>2</sup>）



第1図 調査区位置図

## 2. 遺跡の立地

本遺跡は、旧七北田川と砂押川によって形成された自然堤防上に立地し、東西約2km、南北約1kmの広範囲にわたる遺跡である。古墳時代から近世にかけての複合遺跡であるが、特別史跡多賀城跡に隣接する地理的条件から奈良・平安時代の遺構・遺物を中心とする。

## 3. 調査経過

今回の調査区は、JR東北本線陸前山王駅から約100m北側に位置する。本遺跡では、これまで急増する宅地開発行為に伴なう調査が数多く実施されている。その中で本調査区と比較的近接する調査としては、昭和53年の宮城県教育委員会による流域下水道工事に伴なう調査と、昭和60年の多賀城市教育委員会による千刈田地区の調査があげられる。前者では、古墳時代後半



第2図 トレンチ配置図

から平安時代の遺物が出土している。また後者では、奈良時代の豊穴住居跡と平安時代の掘立柱建物跡、井戸跡が発見されている。

本調査は、多賀城市下水道課が工事主体となって行う公共下水道築造工事に伴なう事前調査として実施した。調査箇所は、下水道工事における幹線道路上の6箇所のマンホール設置場所を対象とした。トレンチは3×5mの大きさを基本とし、多賀城市立第二中学校の北側を東西に走る道路上に第1～3トレンチを、同中学の東側を南北に走る道路上に第4～6トレンチを設定した。なお、下水道工事の進行状況の関係上、調査は前後2回に分けて行った。

#### 4. 調査成果

調査区内の基本層位は、第Ⅰ層旧耕作土及び盛土、第Ⅱ層灰色～暗灰色シルト、第Ⅲ層黒褐色シルト、第Ⅳ層褐色粘土質シルト、第Ⅴ層にぶい黄色粘土質シルト、第Ⅵ層緑灰色粘土質シルトである。このうち、第Ⅲ層は調査区南側に分布が限られ、第Ⅳ層以下の新旧関係は不明である。また、第Ⅳ～Ⅵ層はいずれも第2トレンチのみで確認している。第Ⅳ層での遺物の出土量が最も多く、第Ⅵ層では全く出土していない。第2トレンチでは、第Ⅵ層の下が緑灰色砂質シルトの地山で、第Ⅰ層

上面からの深さは約1.4mを計る。他のトレンチにおいては、地山面までの深さはおよそ30～50cmである。

#### [発見遺構]

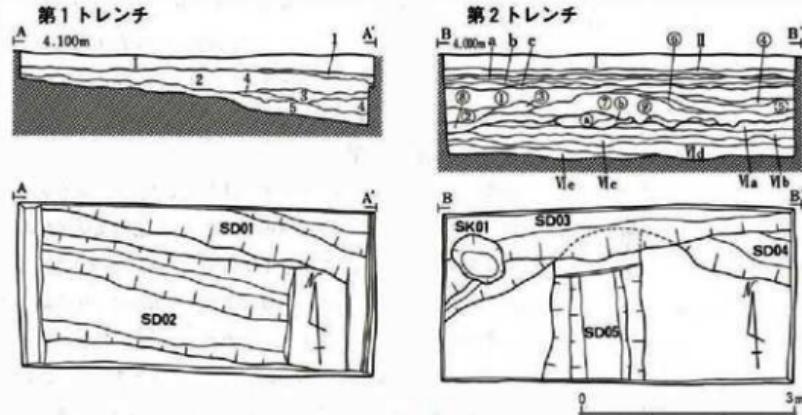
今回の調査で検出した遺構は、溝跡11条、井戸跡1基、土塁1基である。ここでは、おもな遺構のみ記述することにする。

SD01・02溝跡は、第1トレンチの地山上で検出した東西方向に延びる溝跡である。トレンチ東壁付近で重複関係にあり、北側を走るSD01溝跡の方が新しい。SD01溝跡は、深さ約70cmを計り、埋土の中頃に10世紀前半に降下したといわれる灰白色火山灰が5～8cmの厚さで堆積している。SD02溝跡は、幅約1.4m、深さ約30cmを計り、底面にはかなりの凹凸がみられ

る。遺物は前者に土師器杯・須恵器蓋(第7図1)、丸瓦、後者に土師器甕・須恵器臺(第7図2)がある。相方とも土師器については、ロクロ未使用とロクロ使用のものが混在している。

SD04溝跡は、第2トレンチの第IV層上面で検出した溝跡である。東西方向に蛇行しながら延びると思われ、あるいはSD01溝跡と接続する可能性もある。SD03溝跡、SK01土塙と重複関係にあり、これらより古い。深さは50~60cmを計り、SD01溝跡と同じく埋土の中頃に灰白色火山灰を含んでいる。遺物は、土師器杯・甕・丸瓦がある。

SD05溝跡は、第2トレンチの第V層上面で検出した南北方向に延びる溝跡である。SD04溝跡と重複関係にあり、これより古い。上幅約1.3m、下幅約0.5m、深さ約30cmを計る。遺物はさほど多くはないが、ロクロ未使用的土師器のほか重弁蓮華文軒丸瓦2点(第6図1・2)が出土している。



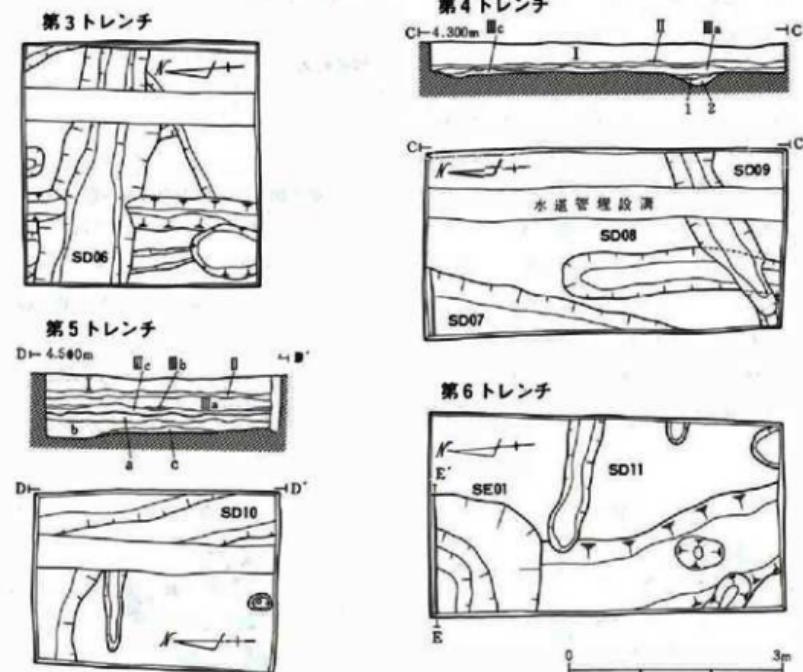
土層観察表

単位	土色	層考	単位	土色	層考
基本解剖			SD03埋土		
I 暗緑灰土色(10G3/1)	泥質作土、盛土		a 灰色(10Y4/1)		
II 暗灰土色(N3/)	マンダリン粒を含む		b 暗灰土色(N3/)		粘土質灰色土を混入
III 暗灰土色(10YR4/1)	粘土質 実測範囲には含まれない		c 灰色(7.5Y4/1)		
IV に近い黄色(2.5Y6/3)	砂質		SD04埋土		
Va オリーブ灰土色(2.5GY5/1)	粘土質 薄い本底層を帶状に含む		① 灰オリーブ色(7.5GY5/2)		
Vb 緑灰土色(7.5GY5/1)	* 深色粘土質土を混入		② + (7.5Y6/2)		粘土質灰色粘土質土を混入
Vc 暗灰土色(N3/)	* 鮎川色粘土質土を帯状に含む		③ (5Y5/2)		*
Vd オリーブ灰土色(2.5GY5/1)	+ 薄い本底層を帶状に含む		④ 灰 + 色(10Y5/1)		*
Ve 緑灰土色(7.5GY5/1)	* 同色の砂質土を混入		⑤ + (7.5Y5/1)		*
SD01埋土			⑥ + ( )		灰白色大山灰を帯状に含む
1 黒褐色(10YR3/1)	暗灰黄土色を混入		⑦ + (7.5Y4/1)		に近い黄色粘土質土を帯状に含む
2 暗灰黄色(2.5Y5/2)	マンダリン粒を含む		⑧ + (GY4/1)		*
3 黄褐色(2.5Y6/1)	灰白色大山灰を帯状に含む		⑨   おい黄色(2.5Y6/3)		灰色粘土質土を多量に混入
4 暗灰黄色(2.5Y5/2)	やや砂質		SD05埋土		
5 黒褐色(2.5Y3/1)			⑩ 灰色(10Y4/1)		
			⑪ + ( )		に近い黄色粘土質土を多量に含む

第3図 第1・2トレンチ実測図

SD10溝跡は、第5トレンチの地山上で検出した南北方向に延びる溝跡であるが、あるいは西側に屈曲する可能性もある。深さ約40cmを計り、埋土中に灰白色火山灰を斑状に含む。遺物は、土師器杯・須恵器杯(第7図4)・甕、丸・平瓦のほか、須恵器甕を転用した円盤状製品(第7図5・6)がある。

SE01井戸跡は、第6トレンチの地山上で検出したものである。トレンチ内には全体の約1/3がかかる程度で全体の形態は知り得ない。わずかに井戸枠の南辺部分にあたるものと思われる板材が縦方向に立てられていることを確認した。また、これに伴なう2本の支柱も検出している。さらに井戸枠内において、立坑の鋼矢板によって切断された状態で、水溜用と思われる曲



土層観察表

層位	土色	備考	層位	土色	備考
基本層位					
I	黄灰 色 (2.5Y 4/1)	粘結土	SD09埋土	1 灰灰 黄色 (2.5Y 4/2)	砂質
II	* (2.5Y 5/1)	上層と下層との境に微細鉄が集積	2 黄灰 色 (2.5Y 4/1)	同色の砂質土を混入	
IIIa	黒褐 色 (2.5Y 3/0)		SD10埋土		
IIIb	黒 色 (2.5Y 2/1)	黒褐色土を混入	a 黄灰 色 (2.5Y 5/1)	灰白色火山灰を斑状に含む	
IIIc	黒褐 色 (2.5Y 3/1)	にい黄色土を斑状に含む	b *	( * )	粘土質 にい黄色土を多量に混入
			c *		

第4図 第3～6トレンチ実測図

物が出土している。他の遺物は、すべて掘り方内出土のもので、土師器ではロクロ未使用的杯(第7図8・9)、ロクロ使用の杯(第7図10)、須恵器杯(第7図11)・甕、丸・平瓦などがある。

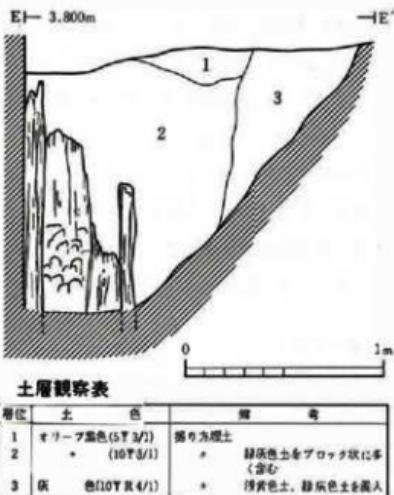
#### 〔出土遺物〕

遺物の出土量は平箱3箱分で、調査面積に比較して量が多い。種類には土師器、須恵器、赤焼き土器、瓦などがある。

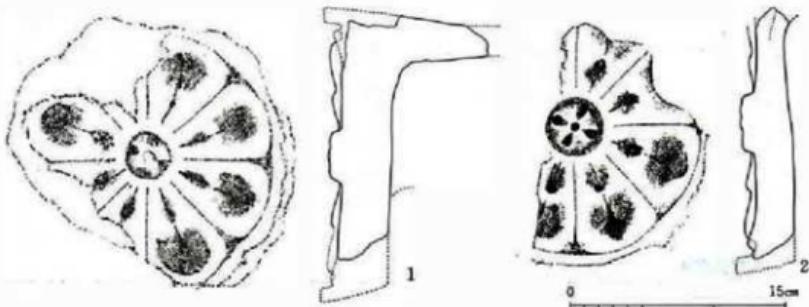
土師器は、ロクロ未使用的ものと、ロクロ使用のものとに分けられる。出土量の比率はおよそ7:3で前者が上まわる。遺構に伴なうものについては、SD05溝跡を除いてすべて両者が混在している。

須恵器は、杯の底部切り離し技法と再調整についてみると、回転ヘラケズリ調整を施し、切り離し痕跡が不明なものと、回転ヘラ切りの後周縁付近をナデ調整しているものが多い。前者は第2トレンチを中心とした調査区北側で多く出土している。また、回転糸切りの切り離し技法をもつものは極端に少ない傾向にある。

赤焼き土器は、小破片では土師器と区別がつきにくいこともあるが、第Ⅲ層以下と遺構内からは明確な資料は出土していない。



第5図 SE01セクション図



No.	種別	遺構	法	量	備考
1	重弁蓮華文軒丸瓦	SD05	直径20.1cm 瓦当の厚さ3.2cm		多賀城跡研究所分類番号222に相当
2	*	*	瓦当の厚さ2.5cm		* 129に相当 瓦当裏面が擦耗 赤褐色

第6図 遺構内出土遺物1(軒丸瓦)

瓦は、多賀城第Ⅰ期の重弁蓮華文軒丸瓦(第6図2)、第Ⅱ期の重弁蓮華文軒丸瓦(第6図1)と単弧文軒平瓦(第8図1)がある。

## 5. ま と め

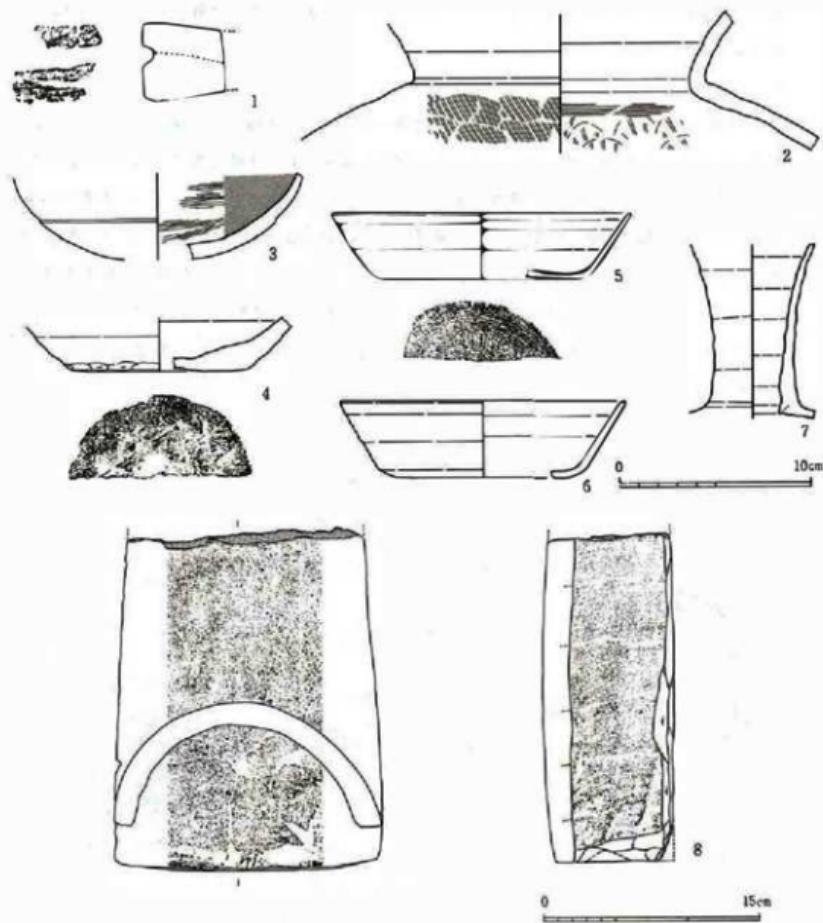
今回の調査においては、全てのトレンチで遺構が発見され、遺物の出土量も多いことが指摘できる。しかし、下水道工事に伴なう部分的な調査であるため、遺構の構成や広がり、新旧関係などは不明な点が多い。また、遺構の年代についても時期は限定できないが、出土遺物の構成をみると、土師器の主体を占めるロクロ未使用のものの大部分が土師器編年における国分寺下層式の特徴をもっていること。さらに、灰白色火山灰降下時より新しい時期の明確な遺構が認められないことから、当地区的遺構の下限年代は、おおむね10世紀前半頃と見えることができる。以上のことから、当地区一帯には明らかに奈良～平安時代にわたって集落が営まれていたと考えられる。



単位: cm ( )は推定値

名	種別	器形	遺構	外観調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
1	須恵器	壺	SD41	ロクロナガ、天井部削輪ヘラケズリ	ロクロナガ	(16.0)			
2	*	壺	SD02	ロクロナガ	*		(11.0)		
3	土師器	壺	SD04	ロクロナガ、底部削輪余切り	*		7.0		
4	須恵器	杯	SD10	* 底部削輪ヘラ切り→ナガ	*		(8.3)		
5	円盤状製品	*							須恵器を転用
6	*	*							* 開口周縁を打ち欠く
7	須恵器	高杯	SED01	ロクロナガ	ロクロナガ				
8	土師器	杯	*	ヘラケズリ、ヘラミガキ	ヘラミガキ				
9	*	*	*	口縁～脚部ロコナガ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	(35.2)			
10	*	*	*	ロクロナガ、底部手持らヘラケズリ	ロクロナガ	(13.5)	(9.0)	5.5	
11	須恵器	*		底部削輪ヘラ切り→ナガ	*	(13.8)	8.4	3.2	

第7図 遺構内出土遺物2(土器類)



「T」はトレチの略 単位: cm ( )は推定値

No.	種別	器形	出土地	層位	外面調査		内面調査	口径	底径	器高	備考
					横	縦					
1	軒平瓦	唐草	1 T	V横	布目	+	縹印き				単張文
2	須端器	杯	+	+	ロクロナデ、平行印き	+	花文あと具板→ナゲ				
3	土師器	器	+	+	唐草のため不明		ヘラミオキ・黒色処理				
4	須端器	器	2 T	斜横	ロクロナデ、底部捺脱ヘラ切り	+	ロクロナデ				
5	+	+	+	+	+	+	縹印き				
6	+	+	+	+	+	+	(15.7)	(10.8)	3.5		
7	+	長頸壺	+	V横	ロクロナデ	+	(16.8)	(9.0)	4.0		
8	丸瓦	長頸壺	+	Y横	縹印き→ロクロナデ	+	布目				

第8図 堆積土出土遺物

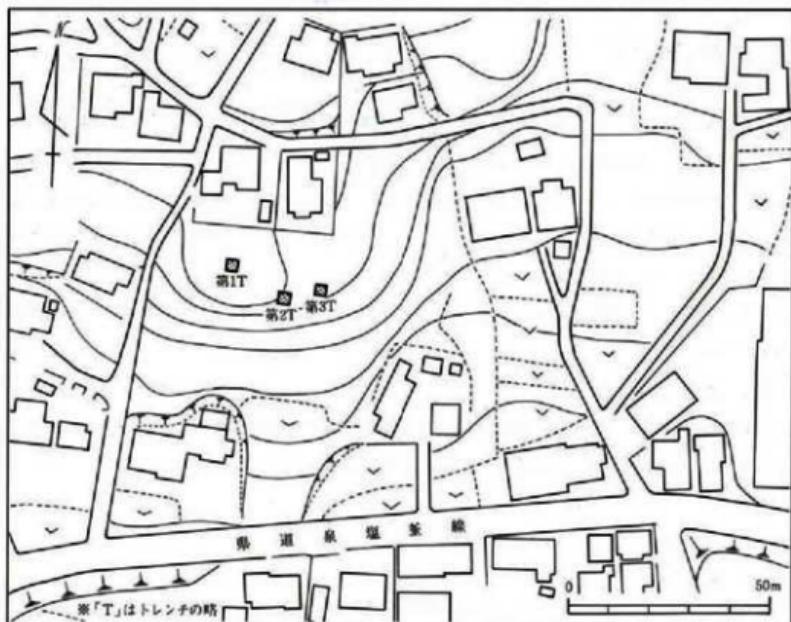
## V 高原遺跡

### 1. 調査要項

○所在 地：多賀城市浮島字高原120番、121番の1

○調査期間：昭和53年3月3・4日

○調査面積：27m<sup>2</sup>（対象面積1,100m<sup>2</sup>）



第1図 調査区トレンチ配置図

### 2. 遺跡の立地

本遺跡は、特別史跡多賀城跡と同じ丘陵上の南斜面に立地する。多賀城跡外郭東辺の東側約500mに位置し、周辺には西沢遺跡、法性院遺跡が所在する。

### 3. 調査経過

本遺跡を含む多賀城跡の東側地域では、宅地造成等の開発がさほど進んでいないこともあり、今まで発掘調査等はほとんど実施されていない。

本件については、地権者に当該地の土地売買の意向があり、その対外交渉の前に遺跡の存否を明らかにしておきたいとの依頼を受けて、試掘調査を実施したものである。

当該地の現況は山林であり、ほぼ中央部に戦時中防空壕を掘った跡だという大きなくぼみが南北方向に走っている。また、その周辺には土壘状及び土壇状の高まりが観察できる。調査にあたっては、この高まり箇所を中心にして  $3 \times 3$ m のトレンチを 3 箇所に設定して行った。

#### 4. 調査成果

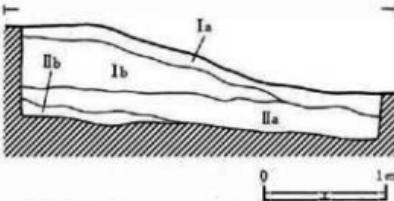
調査区内の基本層位は、第Ⅰ層が表土・盛土、第Ⅱ層がにぶい黄褐色シルトである。

このうち盛土は、凝灰岩質の礫を多量に含む土層からなり、土壇状高まり箇所に設定した第1トレンチで厚さ約1.5m、土壘状高まり箇所に設定した第2トレンチで厚さ約0.5mを計る。また、相方とも第Ⅱ層の下が直接岩盤となっている。第3トレンチでは盛土はみられず、第Ⅱ層の下が赤味をおびた褐色を呈する地山となる。

遺物は土師器、須恵器、瓦の小破片が、わずかに出土している程度である。なお、遺構は検出されなかった。

#### 5. まとめ

本調査区における土壘状及び土壇状の高まり箇所は、防空壕構築時において岩盤を掘りくぼめた際、碎いた礫を一括して廃棄したためできたものであると考えられる。



土層観察図

層位	土色	備考
Ia	褐褐色(10YR 3/3)	表土
Ib	褐色(10YR 4/4)	盛土 凝灰岩質の礫を多量に含む
IIa	にぶい黄褐色(10YR 5/4) +(10YR 5/3)	塊土粒、炭化物を含む IIa よりしまりが強い
IIb		

第2図 第2トレンチ北壁セクション図

#### （引用・参考文献）

吉島良一「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』宮城県多賀城跡調査研究所 (1980)

宮城県多賀城跡調査研究所「多賀城跡・政庁跡 本文編」(1982)

宮城県教育委員会「市川橋・山王遺跡」「宮城県文化財発掘調査報告 (昭和53年度分)」

宮城県文化財調査報告書第57集

多賀町誌編纂委員会「多賀町誌」(1967)

多賀城市教育委員会「山王遺跡」多賀城市文化財調査報告書第10集 (1986)

仙台市教育委員会「年報1」仙台市文化財調査報告書第23集 (1980)

\* 「年報2」 第28集 (1981)

\* 「年報3」 第41集 (1982)

福島県教育委員会・財團法人福島県文化センター「母畠地区遺跡分布調査報告11」

福島県文化財調査報告書第173集 (1987)

# 写 真 図 版

新田遺跡(第6次調査) .....	26~28
八幡沖遺跡 .....	29
高橋浜居場地区 .....	30・31
山王遺跡 .....	32・33
高原遺跡 .....	34

新田遺跡(第6次調査)



図版1 II区南半部遺構検出状況(東より)



図版2 B-10建物跡柱穴



図版3 K-28土塙 拘子出土状況

図版4 B-16建物跡



図版5 III区遺構検出状況(東より)

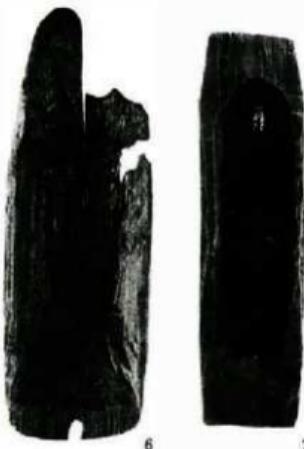


図版6 E-1井戸跡



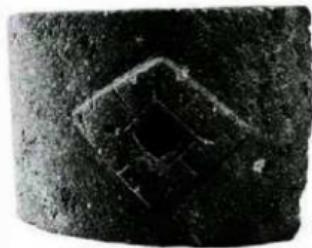


1

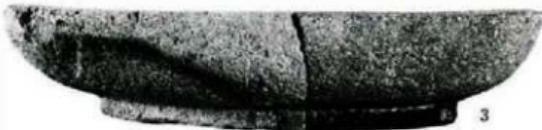


6

7



2



3



4

5

1. 花瓶 (第3图4)

2. 茶臼 (上臼)

3. 茶臼 (下臼)

4. 塔婆

5. 物忌札

6. 舟形

7. 舟形 (K-49出土)

## 图版7 出土遗物

## 八幡沖遺跡

図版1  
調査区全景 (南側より)



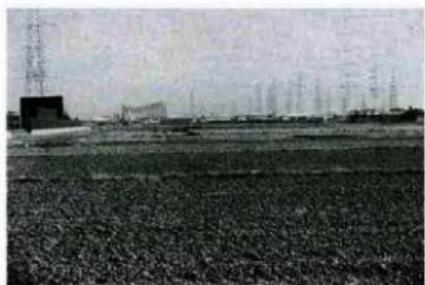
図版2  
第1トレーナー  
SD01溝跡  
(南側より)



図版3  
第3トレーナー  
土層堆積状況  
(南側より)



## 高橋浜居場地区



図版1 調査区遠景(西側より)



図版2 調査区遠景(東側より)



図版3 第1トレンチ(北側より)



図版4 第2トレンチ(西側より)



図版5 第3トレンチ(西側より)



図版6 第3トレンチ土層堆積状況



図版7 第4トレンチ(西側より)



図版8 SO 01・02溝跡 土層堆積状況



図版9 第5トレンチ(西側より)



図版10 SD03溝跡 土層堆積状況



図版11 第6トレンチ(南側より)



図版12 第6トレンチ土層堆積状況



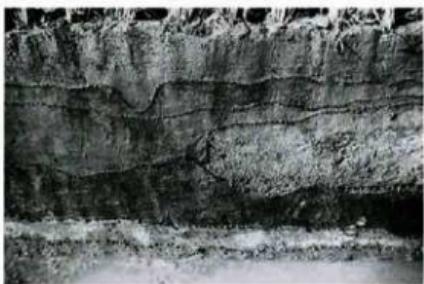
図版13 第7トレンチ(北側より)



図版14 第8トレンチ(東側より)



図版15 第10トレンチ(北側より)



図版16 第10トレンチ土層堆積状況

# 山王遺跡



図版1 調査区遠景（北側より）



図版2 調査区遠景（南側より）



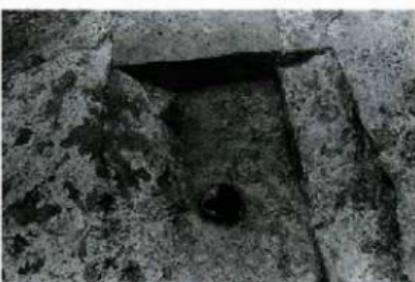
図版3 第1トレンチ（西側より）



図版4 SD01溝跡 土層堆積状況



図版5 第2トレンチ（西側より）



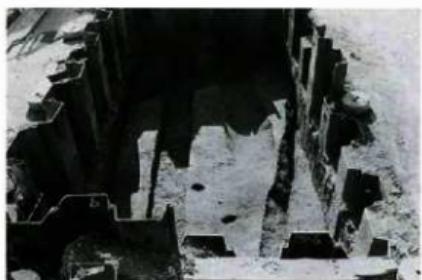
図版6 SD05溝跡 軒丸瓦出土状況



図版7 第2トレンチ土層堆積状況



図版8 第3トレンチ（東側より）



図版9 第4トレンチ(北側より)



図版10 第5トレンチ(南側より)



図版11 第6トレンチ(南側より)



図版12 SE01井戸跡 土層堆積状況



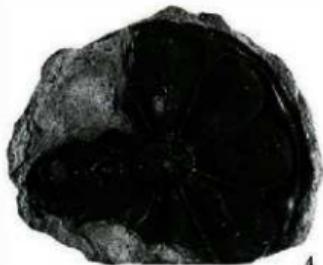
1



2



3



4



5



6

1. 須恵器 杯(第7図11)

4. 重弁蓮華文軒丸瓦(第6図1)

2. 土師器 杯(第7図10)

5. 重弁蓮華文軒丸瓦(第6図2)

3. 須恵器 長振盃(第8図7)

6. 重弧文軒平瓦(第8図1)

図版13 出土遺物

## 高原遺跡



図版1  
調査区遠景  
(南側より)



図版2 調査前状況



図版3 第1トレンチ (南側より)



図版4 第2トレンチ (北側より)



図版5 第3トレンチ (北側より)

## 多賀城市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 駿府遺跡—昭和54年度発掘調査報告書（昭和55年3月）  
第2集 山王・高崎遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）  
第3集 高崎・市川橋遺跡調査報告書一昭和56年度発掘調査報告書一（昭和57年3月）  
第4集 市川橋遺跡調査報告書一昭和57年発掘調査報告書一（昭和58年3月）  
第5集 市川橋遺跡調査報告書一昭和58年発掘調査報告書一（昭和59年3月）  
第6集 志引遺跡発掘調査報告書（昭和59年3月）  
第7集 大代横穴古墳群発掘調査報告書（昭和60年3月）  
第8集 市川橋遺跡—昭和59年度発掘調査報告書一（昭和60年3月）  
第9集 山王遺跡—昭和60年度発掘調査報告書Ⅰ—（昭和61年3月）  
第10集 山王遺跡—昭和60年度発掘調査報告書Ⅱ—（昭和61年3月）  
第11集 高崎遺跡—都市計画街路高崎大代線外1番建設工事関連発掘調査報告書Ⅰ—（昭和61年3月）  
第12集 高崎遺跡—都市計画街路高崎大代線外1番建設工事関連発掘調査報告書Ⅱ—（昭和62年3月）  
第13集 市川橋遺跡—昭和61年度発掘調査報告書一（昭和62年3月）  
第14集 年報1（昭和62年3月）  
第15集 昭和62年度発掘調査報告書（昭和63年3月）  
第16集 年報2（昭和63年3月）

---

多賀城市文化財調査報告書第16集

### 年 報 2

昭和63年3月31日 発行

編集  
発行 多賀城市埋蔵文化財調査センター  
多賀城市中央二丁目27番1号  
電話 (022) 368-0131~4

印刷 遠藤印刷所  
多賀城市八幡三丁目4番7号  
電話 (022) 362-3973

---